# 日本人の美意識

久保田淳

# 日本人の美意識

久保田淳

# 日本人の美意識

久保田淳

講談社

久保田淳（くぼた・じゅん）
昭和8年東京に生まれる。昭和31年東京大学文学部卒業。現在，東京大学文学部助教授。
主要著書『藤原家隆集とその研究』（三弥井書店）
『中世文学の世界』（東京大学出版会）
『新古今歌人の研究』（東京大学出版会）
『新古今和歌集全評釈』全9巻（講談社）
『西行 山家集入門』（有斐閣）

日本人の美意識
昭和五十三年十月十日　第一刷発行
定価——一四〇〇円
著者——久保田淳
発行者——野間省一
発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二—一二—二一／郵便番号一一二
電話・東京（〇三）九四五—一一一一（大代表）
振替・東京　八—三九三〇
印刷所——新日本印刷株式会社
製本所——株式会社黒岩大光堂
©久保田淳　一九七八年　Printed in Japan
落丁本・乱丁本はお取りかえいたします

0095-256748-2253(0)（術B）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 目次

序章　雪のうた—美意識の伝統を求めて——7
I　伝統のともしび——39
歌論における「詞」——41
中世日本人の美意識——57
美意識の探求—新古今和歌集——70
I　新古今時代——70
II　動乱期の歌人たち—西行と定家を中心に——74
III　ほのぼのと天の香具山——83
IV　夢のうきはし——99
V　歌合の世界と方法意識—水無瀬殿恋十五首歌合を例として——109
建礼門院右京大夫——123
百人一首ところどころ——142

II

幽暗の中世 —— 167
王朝憧憬と反王朝 —— 169
歴史と文学—前期軍記を中心として —— 181
文学における中世の始発—古代から中世へ —— 193
『平治物語』の世界—その人物造型を中心として —— 205
平家の世紀の光と影 —— 235

III

古典断想 —— 249
魚鳥閑語 —— 251
海、船、恋の歌 —— 259
海の歌 —— 264
定家十二ヵ月 —— 276
中世和歌寸釈 —— 299

あとがき —— 319

装幀　辻村益朗

# 日本人の美意識

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 序章　雪のうた——美意識の伝統を求めて

## 一

日本の詩歌で雪がどのように歌われてきたかということを考えてみたい。それに先立って断っておかなければならないことは、これは「雪」という素材を一つの例に取って、それに対して日本人がどのように美を感じ、育ててきたかという、美意識の系譜を主として詩歌のジャンルにおいて考えようとするものであって、美意識以前にまで遡ることは意図していないという点である。

万葉時代の人々にとって、雪は吉祥、瑞祥と考えられていたらしい。大伴家持の作に、

新年之初者（アラタシキトシノハジメハ）　弥年爾（イヤトシニ）　雪踏平之（ユキフミナラシ）　常如此爾毛我（ツネカクニモガ）（万葉集、巻十九、四二二九）

新年乃始乃（アラタシキトシノハジメノ）　波都波流能（ハツハルノ）　伊夜之家余其騰（イヤシケヨゴト）　家布敷流由伎能（ケフフルユキノ）（巻二十、四五一六）

と歌われている。これは雪の多い年は豊作だというような、農事の経験を背景として考えられていたことであろう。これを遡ると、豊凶を占うものとして雪を重視する考え方が古くあったし、現にあるということに気づく。

民俗学の立場においては、雪に対するこのような意識こそ、日本人が飽くことなく雪を歌い続けてきた根源であるということになるであろう。池田彌三郎氏は、「雪やこんこん霰やこんこん」という唱歌の「こんこん」は、もと「こんこ」であり、それは「来(こ)う」「来(こ)よ」「来(こ)」であるという興味深い指摘を試みたのちに、

なぜ、雪に「降り来よ」と呼びかけるのだろうか。もちろん、「雪見」などという、後世の風流ごとのために、雪を待ち望むということなどが、出発の原点であるはずはない。

といわれる(『日本文学の〝素材〟』、昭和五三・四、日本放送出版協会)。

おそらくそのとおりであろう。しかし、ここで試みようとしていることは、氏のいわれる「風流ごと」、風雅の心の芽生えとその実際の展開を跡づけようということなのである。

## 二

雪は寒い、冷たいもの、そして人の自由な往き来を妨げるものでもある。そういう点で、人間にとっては本来決して嬉しいものではない。むしろつらい、不愉快な存在である。

古代の日本人も、雪をつらいもの、厭わしいものとして歌っている。たとえば、『万葉集』の相聞歌に、

和射美能(ワザミノ)　嶺往過而(ミネユキスギテ)　零雪乃(フルユキノ)　厭毛無跡(イトヒモナシト)　白其児爾(マラセソノコニ)　(巻十、二三四八)

という歌が見出されるが、ここでは「和射美の嶺往き過ぎて零る雪」が「厭ひ」という動詞を起す序詞として用いられているのである。これなどは山地での雪が厭わしいものと考えられていたことを明瞭に物語っている。「和射美の嶺」は現在の関ケ原付近をいう。現代においてもなお往々にして交通機関が途絶する豪雪地帯である。

また、同じく『万葉集』に天武天皇の次のような長歌がある。

三吉野之（ミヨシノノ）　耳我嶺爾（ミミガノミネニ）　時無曽（トキナクソ）　雪者落家留（ユキハフリケル）　間無曽（マナクソ）　雨者零計類（アメハフリケル）　其雪乃（ソノユキノ）　時無如（トキナキガゴト）　其雨乃（ソノアメノ）
間無如（マナキガゴトク）　隈毛不落（クマモオチズ）　念乍叙来（オモヒツツソコシ）　其山道乎（ソノヤマミチヲ）（巻一、二五）

これは壬申（じんしん）の乱を回顧しての作と考えられているものであるが、ここでは雪や雨は当時の天武天皇にふりかかってくる試錬の象徴のように歌われている。

天武天皇の女御子に但馬皇女（たじまのひめみこ）がいる。そしてまた男御子の一人に穂積皇子（ほずみのみこ）がいる。この二人は異母兄妹で、しかも愛しあっていた。それは人目を忍ばねばならない恋であった。上代においては異母兄妹の結婚は禁じられてはいなかったが、但馬皇女はこれも天武天皇の皇子である高市皇子（たけちのみこ）の保護下に置かれていたからである。

この但馬皇女は穂積皇子に先立ってなくなった。『万葉集』には穂積皇子がなき恋人の墓を見やって詠んだ歌が載せられている。

但馬皇女薨後、穂積皇子、冬日雪落、遥望御墓、悲傷流涕御作歌一首

零雪者　安播爾勿落　吉隠之　猪養乃岡乃　寒有巻爾（巻二、二〇三）

「降る雪はたくさん降らないでおくれ。恋人が眠っている猪養の岡が寒いだろうから」というやさしい心の歌だが、ここでも雪は寒いもの、つらいものと考えられているのである。山上憶良も貧窮問答の歌で、

風雑　雨布流欲乃　雨雑　雪布流欲波　為部母奈久　寒之安礼婆……（万葉集、巻五、八九二）

と嘆いていた。

では、万葉の人々はつねに雪を冷たいもの、つらい、いやなものとばかり歌っているかというと、そうではない。天武天皇は藤原夫人と次のような歌を交わしあっているのである。

天皇賜二藤原夫人一御歌一首

吾里爾　大雪落有　大原乃　古爾之郷爾　落巻者後（巻二、一〇三）

藤原夫人奉レ和歌一首

吾岡之　於可美爾言而　令落　雪之摧之　彼所爾塵家武（巻二、一〇四）

古代日本の英雄とされる天武天皇があたかも子供のように、自分の住んでいる所に雪が降ったのを喜んで、妃をからかい、妃は妃でそれをまぜかえしているのであって、ここでは雪は楽しいも

の、観賞に価するものとなっている。

大伴旅人の父安麿も、

奥山之　菅葉凌　零雪乃　消者将惜　雨莫零行年（巻三、二九九）

と歌っているし、彼の孫家持には、

此雪之　消遺時爾　去来帰奈　山橘之　実光毛将見（巻十九、四二二六）

という詠もある。また、これと並んで、伝承歌として、

大殿之　此廻之　雪莫踏禰　数毛　不零雪曽　山耳爾　零之雪曽　由米縁勿人哉　莫履禰雪者

（巻十九、四二二七）

反歌一首

有都々毛　御見多麻波牟曽　大殿乃　此母等保里能　雪奈布美曽禰（巻十九、四二二八）

という作も載っている。雪山を作ることも行われていた。

于レ時積レ雪彫二成重巌之起一、奇巧綵二発草樹之花一、属レ此掾久米朝臣広縄作歌一首

奈泥之故波　秋咲物乎　君宅之　雪巌爾　左家理家流可母（巻十九、四二三一）

遊行女婦蒲生娘子歌一首

雪島　巌爾殖有　奈泥之故波　千世爾開奴可　君之挿頭爾（巻十九、四二三二）

これらによると、雪を観賞し、雪見をする、雪の清い白さを重んじて、その上に足跡をつけるのを惜しむ、雪山を作り、そこに彩色して草花を描き興ずるというようなことは、万葉時代の人々もしていたことがわかる。

また、梅とか白布を雪に見立てた例もある。

和何則能爾　宇米能波奈知流　比佐可多能　阿米欲理由吉能　那何列久流加毛（巻五、八二三大伴旅人）

筑波禰爾　由岐可毛布良留　伊奈乎可母　加奈思吉児呂我　爾努保佐流可母（巻十四、三三五一東歌）

ということは、逆に雪を白梅その他に見立てることもありえたということである。事実、

吾屋前之　冬木乃上爾　零雪乎　梅花香常　打見都流香裳（巻八、一六四五　巨勢宿奈麻呂）

梅花　枝爾可散登　見左右二　風爾乱而　雪曽落久類（巻八、一六四七　忌部黒麻呂）

など、いわゆる筑紫歌壇において詠まれた諸作において、雪は白梅に見立てられているし、『懐風藻』においては、



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com